

國學院大學學術情報リポジトリ

板碑・起請文・おふだ：「調査」から考える日本史

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国史学会 公開日: 2024-05-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 千々和, 到, Chijiwa, Itaru メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000442

板碑・起請文・おふだ

— 「調査」から考える日本史 —

千々和 到

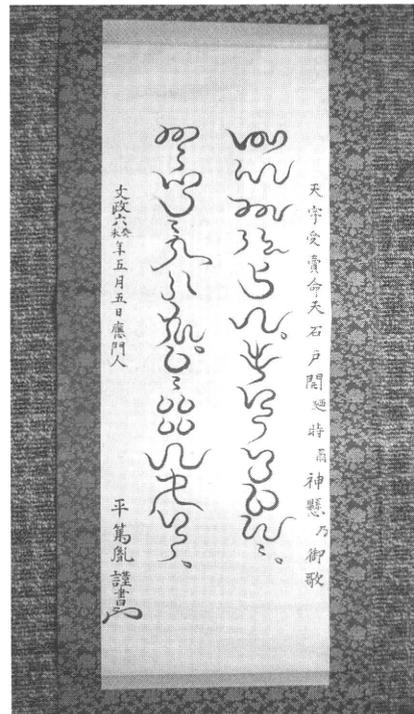
今ご紹介いただきました千々和です。一時間、よろしくお願ひいたします。私が今日お話ししたいと思っっているテーマは三つです。三題噺という落語の話がありますけれども、それに倣ったわけではなく、面白い話をしようということでもありません。最近では学生を笑わせようと面白い話をしようと思うのですが、誰も笑ってくれません（笑）。ですが今日は、久しぶりに笑い声が聞けました。

それではお話を始めます。まずA・B・Cそれぞれをお話しして、最後にまとめようと思います。話の間に写真を使います。それから二つ、ここにちよつと今日のお話しと関わりのある重要な掛軸を持参しました。私のお話が終わってからもしばらく掛けておきますので、休み時間にもご覧になってください。まず向こうは、今日のお話の中であまり焦点を当てられませんが、神代文字（じんだいもじ）、神代（かみよ）の文字、その一例です。ここに名前がありまして、「平篤胤」とあります。平田篤胤の字によく似ています。似ていますが、本物であるかどうかは私にはわかりません。で、ここに、「ひ、ふ、ふ、の、み、よ…」ではじまる神代文字が書かれていますので、あとの説明

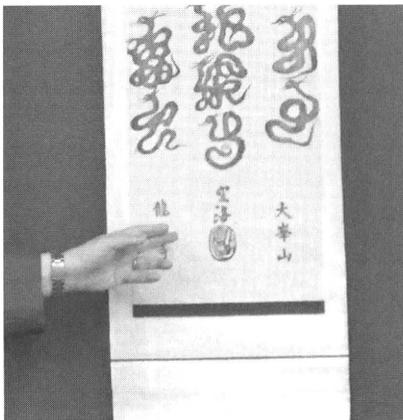
のときに「あ、こんなもんなんだ」とわかっていただくために掛けました（図面a）。

それから、こちらのほうは、ここに空海とあり、弘法大師空海が書いたということになっているもので、これはご覧になっていただけるとわかると思いますが、版木で刷ったものです（図面b）。ですから、肉筆ではありません。四国八十八ヶ所に行かれた方は、よく

弘法大師空海の花押のあるものを見ることがあるかと思うのですが、空海がもし花押を使っていたとしたら、日本の最古の花押は空海のもの、となりますけれども、一般には認められてはいません。丸を書いて、それでぐるぐるると書いた花押のようなもの、と言えはいいでしょうか。その上は、角のある蛇です。「角のある蛇」とは、要するに龍なんですね。龍で「龍泉寺牛玉宝印」と書いてある。そのようなものです。そして、「大峯山龍泉寺」とあります。大峯に登山するときにふもとに水行をする池がありますが、その池のあるお寺が龍泉寺です。この二つ、いま簡単に説明しましたけれども、今日のお話とどこかで結び付くといいな、と思いつつ、ここに掛けさせていただいて



図面a 神代文字の掛軸



図面b 龍泉寺の掛軸（上部を省略）

おきます。

さて、本題に入りますが、お話をA・B・Cと分けました。Aが「板碑との出会い」、Bが「起請文との出会い」、Cが「日本のおふだ」です。最後にばたばたとなってお話できないと困りますので、なんでこのA・B・Cを選んだのか、それぞれの冒頭で簡単に話します。

A 板碑との出会い

まず、板碑との出会いですが、私は「まえがきにかえて」という、ちよつと長い文章で、板碑調査の思い出を書きました。その『板碑の考古学』という本が、二〇一六年の年末に出ました。高いですし重たいです。でも、共編の浅野晴樹さんはじめ、私以外の方々は、本当に真面目な方々ばかりが書いて下さっています。どうでもよいようなことを書いているのは私だけ。いつものことですから。それで、同世代の方も何人かそれに論文を寄せて下さっております。

なので、その本の内容とは、できるだけかぶらないように、今日のお話をさせていただけようと思います。

いきなりですが、私たちの大学時代というのは、不幸な時代だったと思います。学生のストライキで、授業が行われなかったのです。

特に私のいた東京大学文学部では、授業がなかった日数がひときわ長く、一年半に及びました。授業がないというのは学生の一人として、私自身もちろん、責任はあるのでしようけれども、ともかく、文学部の教授会が授業することを拒否していた。学内に機動隊が入り、学生の占拠は解消し、ストライキも雲散霧消した。けれども教授会は、学生の意見が対立しているからだめだなどと言って、まじめに学生に対応しようともせず、授業もやろうとしない。

一方で当時の学生自治会の執行部も、無責任にもほとんど皆どこかに隠れてしまっている。そうした状況下で、私ものごく尊敬し、いろいろなことを教えて下さった佐藤進一先生が教授会に対して憤って、授業が再開された後にも出講を拒否されて、そのまま大学を辞めてしまわれた。優れた先生を追い出すことになった、東大闘争というものがございました。

それで、授業がないのですから、私は何をどう勉強したらいいかわからない。やっと授業が始まって、卒業論文だけは書かないといけない。そこで書こうと思っていたのが、「八幡宮の歴史」でした。ところが、その研究をするためには、東京大学史料編纂所が所蔵するたくさん写本を見なければいけない。見に行ってみました。見に行きましたら、私しか待っていないのに、カウンターでも長い時間、待たされた。全学ストで迷惑をした職員の方が、学生を嫌いなのかと思いましたが、困った私は、とてもではないけれど、文献史料での卒業論文の執筆は無理かなと、思い知らされました。

それでは、何ができるか。大学一年の時からずっとあちこちで板碑の調査をしておりました。その板碑の調査というのは、私の父親が板碑の研究者だったもので、板碑の調査を組織して埼玉県などでやっていた。そこで、私はその手伝いをしたのですが、これが楽しいのですね、板碑の調査というのが。研究するのはあまり面白くないですけども、調査は本当に楽しい。拓本を採る、するとどんどん碑面の字が読めてくる。こんな楽しいことはない。こうして、そちらにはまっていたわけですが、一方で、それで研究しようとは思っていませんでした。だけど、史料編纂所が十全に使えないなら、中世史で文献史料だけでは無理だろう、それなら板碑を中心にしていこう、と。

やっと本題に入ります。板碑との出会いです。先にもふれた板碑の調査は本当に楽しかった。真夏の暑い中でも当時は辛いと思わなかったですね。年齢を重ねてだんだん辛いと思うようになっていきますけれども。あちこちで、

人員が足りないからと手伝いに行く、そのような形から入りまして、後に大学院に入学できて、調査チームのリーダーを務めるようになり、最初にリーダーになった所が埼玉県の飯能市でした。飯能市というのは、そのころ、板碑の調査があまり進んでいなくて、ほとんど手つかずの状態でした。そこで、市内の板碑を二年かけて調査いたしました。お名前を御存じの方がいらっしゃると思いますが、武田佐知子さんという古代史の有名な女性研究者の方がいらっしゃいます。その武田さんも、どういう縁かは覚えていませんが飯能の調査に来てくださいました。だから、武田さんと別のところで会ったときに「幼馴染ですね」と申し上げたら、「え？」と言われましたが。そのようなこともありまして、文献の研究者と言われる方も、いろいろな方が板碑の調査を面白がってくれた。これが、当時の板碑研究を考える上では、一番大事なことのひとつなのだろうと思います。

では、板碑の調査をなぜ私たちが行なったか。いま板碑と言えば、これは完全に考古学のジャンルです。ですから、『板碑の考古学』の執筆者一覧を見たときに、私以外はほぼ全員、専門が考古学の方々でした。私だけが、そうではありませんでした。それで、はっきりとわかりました。私が最初に板碑で卒業論文を書くこうと覚悟をしたときは、考古学者といわれるような方々は、立正大学の坂詰秀一先生以外は、あまり板碑の調査に深くは関わっておられないように思います。そうではなくて、教員をしておられるとか、会社に勤めているとか、そういった方が、夏休みを取って調査に参加する、そのような時代だったのです。では、ここに何人もいらっしゃるかと思いますが、純粋に考古学をなさっておられる方は、なぜ板碑の調査に来てもらえなかったかといえ、きつと当時は発掘がとて忙しかったのですね。日本が高度成長に入る時代、あちこちで遺跡の発掘がおこなわれていた。

それでは近年になって、板碑の研究者がほとんどみな考古学の専門家の方々になったのはなぜだろう。それは多分、掘るところが減ったからなのか、というのは悪い冗談でしょうが、やはり考古学という分野の中で、中世の遺物・遺

跡をきちんと位置づけようという動きがあり、そして考古学の方々が板碑も調査するようになってくれたのではないかと。そう思います。私は、決してジェラシーを感じることはありません。ジェラシーではなく、先ほど紹介した『板碑の考古学』を見て、あ、すごい、と思いました。先週も四国でその方々と一緒に調査をしたのですけれども、やはり、もう私なんかが出せることではない。要するに、本当にモノをどうみるか、その調査方法はとても素晴らしいと思いました。ただ、もちろんそうではあるのですが、やはりもう少し、私たちが以前におこなった板碑の調査のことも、思い起こしていただくことも大事ではないかなということ、最近感じています。

さて、板碑について申しますと、ごく最近ものすごく大きな出来事がありました。それは、十数年前から三宅宗議さんをはじめ、いろいろな方々の手で、調査が進んでおりましたが、板碑の石材の切り出し場、板碑石材の言わば生まれた場所のいくつかが確定できた。さらに確定できた遺跡が、国指定史跡になった、ということがありました。それは埼玉県の小川町にある。そこにはいくつもの遺跡がありますが、その中の今のところまだ三箇所だけが「下里・青山板碑製作遺跡」として国指定の史跡になりました。それが二〇一四年のことですが、まだ何か所も近所に候補地があつて、そうした遺跡が次々に指定されていくのではないかと、というようなことを聞いております。

ところで、この写真が日本で一番大きいと言われている板碑です（写真1）。五メートルくらい。これを正面から見ると「バク」、つまりお釈迦様の梵字が刻まれていて、樹木と比べてその大きさがわかりになると思います。こうした板碑はそうたくさんはない。これが現在の状況で、ほとんど壊れずによく守られていたと感心します。

次の写真は、観光地として知られる長瀨町で、かつて青石石材採掘遺跡として指定されました（写真2）。青石をたくさん産出したのでしよう。ただ、ここはまだ埼玉県指定史跡で、国指定史跡ではありません。というのは、ここか

7 板碑・起請文・おふだ



写真1 野上下郷の大板碑



写真2 野上の採石場跡

ら切り出したという根柢を見出せない、おそらく当時の切り出し場なのだろうが、ということで県指定に留まっております。

一方、なぜ小川町の遺跡が国指定史跡になったかという点、もうほとんど木が密集していますが、この木はせいぜい二十年程度のものでしょうから、木々がない姿というのを想像していけばいいわけです。そしてここをどんどん登っていきます。そうすると、青石がごろごろしています。青石の欠片もたくさんあって(写真3)、あたり一面青石の欠片が散らばっております。その石をよく見ますと、ここに削り跡があります(写真4)。ノミで削られたノミ跡です。様々な考え方ができると思いますが、これは捨てられた、要するにもう板碑にはならなかった、そうした石材からです。平面だけでなく、急斜面でも作業がおこなわれていたのですから、すごいものです。ひとりですごく感動しているも仕方がないですが、要するに、こうした木々は数十年で生え変わりますよね。それで、この辺に、もうびっしりと、何百年も前に板碑を作るために切り出された石がある。全



写真3 下里 一面の石の原

面が、青石の欠片で埋め尽くされています。

そしてその中に、人の体よりも大きい程度の大きさにして、その石を切り出そうとした痕跡もある（写真5）。何があったのか、切り出しを途中でやめたと考えられます。

この遺跡を国指定史跡にするときに、いろいろな意見はあったのですが、「板碑の原石の切り出し場」というのが調査の時の私たちの考え方でしたが、文化庁はこれを「板碑製作遺跡」と位置付けました。これを、私などは、深謀遠慮があつてすばらしいと思えました。つまり、この遺跡は、板碑の製作のまさに第一歩を示している。梵字を彫つたりする前の段階で、板碑の形まで作る、これから磨きを入れて、そして梵字を彫つて、さらに銘文を彫る。この何段階かの作業の中の一段階目を、私たちは捕まえたのだ、このように考えてみたらよいのではないかと思つています。つまり、二段階目以降の作成にともなう板碑は、ここにはない。別のところに運ばれて、加工したと考



写真4 石に刻まれた加工跡

えられるわけです。

そして残された課題として知りたいのは、この遺跡が何年ごろに始まり、何年ごろまで使われたのかという点です。それについては、現在は調べようがありません。中世といえる大きな根拠は、まさに板碑が、中世にしか作られていないから、ということですが。また研究者が「押し削り」とよぶ技法で石を削っている、そして、その技法は、いま関東などでは失われているけれども、硯の石材を削る際の技法としては別の地域で残っているそうです。そうしたことも関係しますが、こうした状況下でこれから小川町は、残されている多くの遺跡を国指定まで持っていけるか、ということだろうと思います。もちろんそれは良いことだとは思いますが、一方で、「将来にとっておこうか、私たちがいま、全部を消費しきらずに」、つまり、あとの遺跡は、もし開発などの緊急性がなければ、発掘調査を急がなくともよいのではないか、そのうちに、もしかしたら今は知りえないいろいろなことがわかってくるだろうし、このまま置いておくことも、悪くはないかもしれないかなという感じも、いくらか私にはあります。



写真5 川岸の石に刻まれた切り出し痕

B 神代文字の黒印の捺された料紙に書かれた起請文との出会い

さて、二つ目のテーマですが、「とても興味深い起請文との出会い」です。

起請文の発生は平安時代後期でした。それから鎌倉時代、そして近世にいたるまでの展開は、すでに別に論文等で私なりの考えをお示ししていますので、ここでは、江戸時代末から明治初年にかけての岡山藩の起請文について紹介をしたいと思います。それは、現在は岡山大学にたくさん保存されています。そこで、数年前に数回にわたって何人かの仲間と調査をさせていただきました。その中に、お示しするような変わった起請文もありました。そのごく一部分だけを、写真でお見せいたします。包みに「御小納戸」と書いてあり、文書の冒頭には「起請文前書之事」とありまして、ちゃんと仕事しますと、大体そのようなことが書いてある文書があり、その後ろに、料紙が貼り継がれて、「明治二年二月二日」、という日付があります。そして「梵天帝釈四大天王…の神罰、冥罰をうける」などあり、この紙は裏が熊野の牛玉宝印であることが透けて見えます。一枚目の前書きの部分は、牛玉宝印を使っています。それもはつきりとわかります。そして、この「神屋栄二郎」という人物の花押を見ていただきますと、その上端に染みがあります。これが血判です。テレビや何かできちんと時代考証をしていない番組だと、親指を切つてばあつと血を出す、あるいは拇印のように捺すようなやり方です。これもありますけれども、戦国時代の起請文では血の量は多くて、江戸時代後期では、一般に血の量は少ないです。だから、これでも血判なのです。ともかく、こうした血判がされていました。

問題は次です。こうした起請文が貼りつがれていました（写真6）。これは、「右之条々、天神地祇に誓い、堅く相守り申すべく候」。右の条々というのは一紙目の誓約内容、それを破りません、もし、そむいた場合には神罰を蒙るべきものなり。よって誓文如件、とだけあります。そして、河瀬源太郎ですか、血判の無い代わりに、花押の上部に黒

印が捺されています。つまり、明治のはじめ江戸幕府が減びてからも藩としてまだ江戸時代と同じやり方で起請文を書かせる。だけど、明治二年から三年の間にそれがされなくなつた。そしてこの文書の料紙は、裏にこうした黒印（写真7）が捺されています。もう牛玉宝印は使われなくなつたけれども、牛玉宝印の代わりに、このような黒印の捺された料紙を使つていました。そして、よく見ていただくとわかりますが、この黒印の端から端まで、欠損がありません。要するに、この黒印は、本当に新しいハンコであると推定できます。そしてその黒印に何が書いてあるか、お読みになれますでしょうか。

これが、「神代文字」の一例なのです。何と書いてあるかと申しますと、中央には「いちのみや」と書いてあります。そして右行には「かみの」と書いてあり、左行には「しるし」と書いてあります。つまり、「いちのみや、かみの、しるし」、「二宮、神の印」。(実は、私には一字読めなかつたのですが、同僚の遠藤潤さんが教えて下さいました。)

ここまで見ていくと、もういくつかの疑問が出てまいります

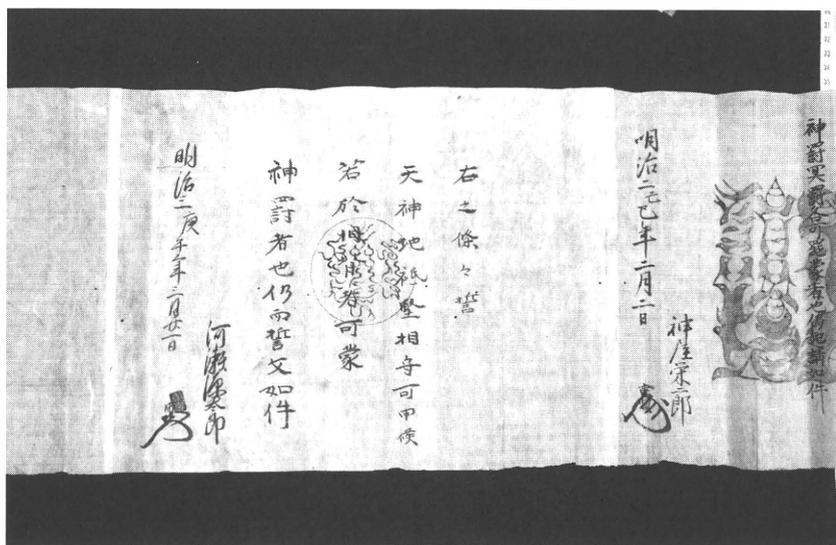


写真6 岡山藩藩士等起請文

す。つまり神代文字は、江戸時代後期の国学者、平田篤胤の整理で十三種類に分類されていますが、篤胤によれば、その十三種類は、この種類の神代文字はどこで使ったもの、この種類の神代文字はどこで使ったもの、というように分かれているはずなのですが、この起請文の料紙の黒印では、そうしたことは全く関係ない。たとえば、それがどこでわかるかと申しますと、「いちのみや、かみの、しるし」ですので、まず三行目の上の「し」と下の「し」は同じ形の字でなければいけないですね。ですが、全然違う字です。それから、一行目の「かみの」の「の」、これは二行目の「いちのみや」の「の」と同じ字であってよいだろうと思いますが、全然違う。このように、当時の神職の人たちは、篤胤が思ったようには必ずしも神代文字を使っているわけではなかった。むしろこれは、いろいろな種類の神代文字を混ぜて使っている、という黒印なのです。この文書は岡山藩に残されたものですから、おそらく藩内のどこかの神社で刷りだされたものだろうと思いますが、いまのところ、確定はできていません。

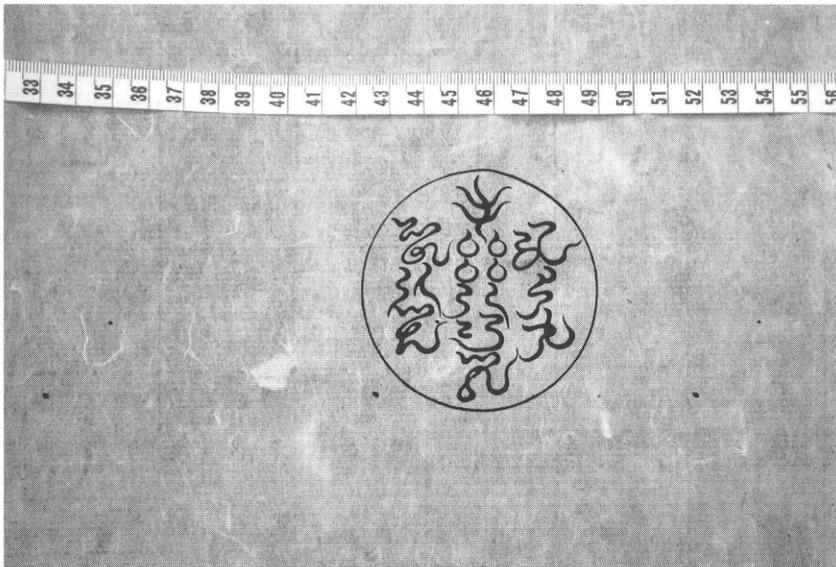


写真7 岡山藩藩士等起請文の料紙裏の黒印

ただ、少なくともこの例から、起請文は、明治の初めまで生き残っていた。しかし、生き残った起請文は、とても形が変わったものになった、ということも理解していただけたかと思えます。

C 日本のおふだ

最後に、「日本のおふだ」に入ります。

先ほどふれた明治時代、仏教から神道へという明治初めの廃仏毀釈と関係する人物に、権田直助という人がおります。この会場の中に神道文化学部の方がいらっしゃれば、もう何度もその名前を聞いたことがあると思います。相模の大山阿夫利神社に明治初めに入った人物です。大山阿夫利神社の地は、明治初めまで寺でした。「大山寺」というのがお寺の呼び名です。それでその大山寺が、地元の人たちの意向もあつたようですけれども、神仏分離、いわゆる廃仏毀釈によつて廃止されます。お寺が廃止されて、神社となります。ところが、その神社がきちんと運営できないということでしょうか、権田直助がこの神社に入つて改革を進めました。権田直助という人は、国学院大学にもとても縁の深い方でしたが、国学院への着任のころに病気になり、亡くなつてしまつたということです。彼は平田派の国学者であり、討幕運動の実行者の一員でもあり、討幕のためにとても大きな役割を果たした人物でした。明治政府に出仕しますが、政府の中のトラブルで職を追われ、一年以上謹慎を命じられた。その後、大山阿夫利神社に入った。それで、今、神社の境内には、権田直助の座像があります（写真8）。

近年、銅像の設置場所が替えられたように思いますが、ちょうど東京に面するように置かれているのでしょうか。大山に行かれたことのある方はおわかりになると思いますが、大山阿夫利神社は、下社というのが、実は相当登つたところにございます。そこからさらにうんと登ると、やっと頂上の上社にたどり着く。二年前ですか、私、久しぶり

に大山に登りました。神社の「おふだ」をいただきに行ったのですけれども、運悪くケープルカーが止まっていた時間で、下から歩いて登ったので、おかげでいろいろなものを見ることができました。しかし、下社まで登って、疲れて、もうこれ以上は登れないと思い、下社だけで帰ってしまいました。今はもうケープルカーが動いているようですから、下社のすぐ下までそれで登り、そこからあと坂を登れば頂上の上社ですから、今度またいつか、必ず参拝に行こうと思っています。

それはともかく、この大山阿夫利神社では、参拝のちに、おふだを頂きました。それは、密封されているおふだなのです。密封されたおふだの封は、やはり破ってはいけないだろう（それは、そのくらいの気持ちはあるんです、私は）。それで、後ろからライトを当ててみました。やっっていること同じではないかと言われるかもしれませんが、気持ちは違います。そして、大山の三神名が書かれていて、さらに、神代文字を使っておられ「ひふみよいむな…」と書かれているということもわかります（写真9）。



写真8 大山阿夫利神社の権田直助像

それから山を下りました。下社から半分くらい下ったところ、右手に、お寺のお堂があります。それが再建された大山寺です。

おおよその大山の説明は以上ですけれども、それでは何があったのか。それは『伊勢原市史』などをご覧になれば、ものすごく激しい争いがあった、それを治めるために権田直助が大山に入った経緯もわかると思います。そのあと大山は、神社として生きてきたと、そういうことになる。それで、私のようにおふだを調査している人間からすると、やはり神代文字になったばかりの頃のおふだと、現代のおふだ、そして大山寺だった近世のおふだ、それらはずいぶん姿を変えている、ということを確認できることが重要だと思います。それらは信仰の歴史を考えるうえで、どれも重要な史料であると思っただ次第です。

相模大山での近年の経験をお話しましたが、日本のおふだは、海外にコレクションとして残ったものがいくつもあり、それを調査した経験を、最後に少し話させていただきます。



写真9 大山阿夫利神社のおふだ

国学院大学がCOEという国のプロジェクトに採択された時、プロジェクトの推進を中核で担った阪本是丸先生のお助けをいただいで、私も太田直之さんたちとフランスやイギリス、ジュネーブに調査に行かせていただきました。それで、フランスの人がよく日本のおふだを集められているように、私は感じました。私たちが主に調査したおふだは、三人の外国人のコレクションです。

まず、明治初年のころ、日本にやってきてお雇い外国人となり、それから東京帝国大学教授を務めたバジル・ホール・チェンバレンという人がいます。彼は、イギリス人ですが、フランスで成長して来日し、長く滞在し、一九一一年かと思いますが、日本を離れ、ジュネーブに住み、以後は一度も日本には来なかった。日本人の教え子とは、それからも交流をもったようです。なお、彼のおふだ収集ですが、それには、小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）がとても大きな協力をしていたことが知られています。ですので、八雲の努力を示すように、彼の住んでいた出雲のおふだは、とりわけたくさん含まれていました。

このチェンバレンが明治時代初めからですので、一番古い種類のおふだをたくさん蒐集し、それをヨーロッパに持ち帰りました。現在、イギリスのオックスフォード大学のピットリバーズ博物館には、彼が収集した日本のおふだが、収められています。

次に、昭和の、第二次世界大戦前夜の一九三〇年代にフランスから研究に来た、アンドレ・ルロワグーランも、日本のおふだのコレクションを、ヨーロッパに持ち帰りました。これは、その半分がジュネーブの民族学博物館に収められていて、私たちも調査をさせていただきました。

そして、戦後に日仏会館のフランス学長をされたベルナル・フランクのコレクションです。彼の夫人は、淳子・フランクさん（ご自分では、仏蘭久淳子と名乗っておられます）で、フランクが残した日本のおふだを、コレージュ・

ド・フランスのコレクションとした上で、『お札』にみる日本仏教』（藤原書店、二〇〇六）として夫の日本のおふだに関する遺稿を、出版されています。私が一番印象に残っているのは、フランクはお寺に行つて、お寺のご住職にお辞儀をして、そしておふだをいただいたのです、と。コレクターではないのです、というお話でした。そのお話の通りの写真が、この本の裏のカバーに掲載されています。

三人とも、すばらしい研究者です。その中で、私はチェンバレンというひとの生き方に、特に感じるものがあります。まず、日本に来たチェンバレンは、自分の名前を漢字で書いている。漢字が堪能なんですね。王様のお堂と書いて、『王堂』と自称する。つまり英語の名前を、漢字に変換している。そのようなことがわかります。チェンバレンは、日清戦争の前まではとても日本を愛し、日本の文物をたくさん集めていた、しかし、彼が日本を去つてもう帰つてこなかったという年は、私、近代史は不得意ですけども、一九一一年です。日露戦争に日本が勝ち、そして前年に大逆事件が起き、日本人は大逆事件の実際をほとんど知りませんでした、外国の新聞を読んでいる人たちはその実情をよく知っていた。そうした中で、日本という国に愛想をつかして日本を去つていったのではないかとも思えます。だから逆に、チェンバレンは、あまり日本人々からは好まれていないという話をよく聞きます。でも、彼の集めたおふだを調査させていただきますと、彼の人間性を私は感じます。一生懸命自分の名前を漢字で書き、自分の手紙を出そうとしたチェンバレン。日本に裏切られた思いで、離日したあと、日本に戻ってくることはなかった、ということなのだろうか、私は理解しています。

以上、やっぱり「三題噺」になりました。最後に、これをどうまとめようかと悩みますが、まとめる言葉は一つだ

けです。

それは、いろんな本を読んで学ぶ姿勢は、もちろん大事だと思えます。ただ、やはり歴史の研究には、「調査」に勝るものはない、と。現地を「調査」して、そして実物を見て、現物を見て、その地で文書を見せていただいて、お話を聞いて、そこから感じ取るものは、本から得ただけの知識よりも、あるいは他のひとが書いた論文を読んで、その中のここが使えるといった使い方をするよりも、何にもまして貴重なものです。時間は、たしかにかかります。ですが、それが、歴史学というものを好きになることに繋がるのではないか。そんなことを考えます。

私の在任期間は、あと少しですが、やっぱり体が動く限りは調査をしたい、というのが本音です。でも、日光が輝くような真昼に、板碑の拓本を取る力は、さすがにもうありませんし、現在の私の拙劣さでは、板碑が墨で汚れるやもしれません。ですから、そのようなことはできるだけしないで、でも、もう少し研究はしていきたい、調査もしていきたい、そう思っているということで、お話しを終わりにさせていただきます。

ご清聴、ありがとうございました。

本報告に関係する主な文献

楠家重敏『ネズミはまだ生きています』、雄松堂、一九八六

三宅宗議「小川町下里で採集した青石の加工石材」『埼玉史談47—1—』、二〇〇一

J・キブルツ、宮家準、稲城信子、松崎碩子、J・デユコール、遠藤基郎、太田直之、千々和到「特集 護符・牛玉宝印研究の現状と課題」、『国史学 187』、二〇〇六

ベルナル・フランク著、仏蘭久淳子訳『「お札」にみる日本仏教』、藤原書店、二〇〇六

- 千々和到 「バジル・ホール・チェンバレンのお札コレクション」、『研究紀要 17』、日本村落自治史料調査研究所、二〇一三
- 浅野晴樹・千々和到編 『板碑の考古学』、高志書院、二〇一六
- 川島敏郎 『相州大山信仰の底流』、山川出版社、二〇一六
- 吉田稔 「下里・青山板碑製作遺跡」、『日本史の研究 二五四』、山川出版社、二〇一六
- 千々和到 「飯能市郷土館収蔵の「おふだ」に書かれた神代文字」、『飯能市郷土館研究紀要 8』、二〇一七